

# ゴーイング・ウィズイン 1990年 池湧社

## シャーリー・マクレーン

1934年、米国バージニア州生まれ。ブロードウェイのコーラスガールとして出発、『ハリーの災難』で映画デビュー。『アパートの鍵貸します』、『愛と喝采の日々』などに主演、演技派女優としての名声を高めた。1984年『愛と追憶の日々』でアカデミー主演女優賞、1989年『マダム・スザーツカ』でゴールデングローブ賞主演女優賞を獲得する。

著書に『アウト・オン・ア・リム』『ダンシング・イン・ザ・ライト』『オール・イン・ザ・プレイング』『風を追いかけて』がある。『アウト・オン・ア・リム』は、マクレーン自らの主演でテレビ映画化され、アメリカで放映、日本ではビデオとして発売された。

## ニューエイジとは

今日の心理学者は、大多数の人々の表面的な行動に潜んでいる狂暴性について深刻に心配している。実際、これは暴力と自己破壊的な行動の増加として現れているのだ。私達の文明を脅かしているこうした圧力を解決する唯一の方法は、人々が自分の暴力性の真の原因に向き合うことだと、心理学者は言っている。憎しみや怒りの原因を自分で理解できれば、私達はその感情を変えることができ、時には、すっかりその感情を解放することもできるのだ。これは、自分の感情にさえも私達は責任があるということを意味している、つまり、私達は自分に何か問題が起きたら、決して人のせいにしてはいけない。人のせいにせずに、すべては自分が引き起こしているということを認め、受け入れて、なぜ自分はそのように感じているのか、もっと意識的に気づくようにする、ということなのだ。

それをずっと続けていると、自分についてどんどん理解が深まってくる。ニューエイジ流に言えば、自分がどんな人間か、自分はどのような行動をしているのか、それまで気づかずにいた部分にはっきり気づくようになる。私達は自分について、思いもかけないようなことを学んでいるのだ。

学びの唯一の源は“自分自身”なのだ。

いわゆる“自分主義”は、このように考えれば、自分自身をより深く知るための道となり、その結果、人との対立がなくなれば、社会に対してもっと貢献することができるようになる。

現在は、私達が自分自身を癒し、それによって他の人々をも癒し始めている時代だと思う。責任は教会や国や学校のような権威を持つ組織にだけ帰せるべきものではない。責任は私達一人ひとりにあるのである。

他人に自分の期待をおしつけないということこそ、真に彼を愛することなの

だ。相手にやりたいようにさせてあげるやさしさを持てた時、私達は愛するものから自由になるのだ。そして、妙に思うかもしれないが、かえって、お互いの愛情は深まるのだ。だから両親や自分を大切にしたかったら、相手に対する盲目的な期待や要求に執着して、それが満たされないとイライラしたり憎んだり恨んだりするのをやめればいいのである。このプロセスで自分が何なのか、自分が人生に何を望んでいるかをはっきり見すえる勇気を持つことによって、自分の責任を受け入れるのである。

自分や世界がどうなってほしいかとたずねると、ほとんどの人は、平和になってほしい、と答える。

一人ひとりが自分の内に平和を実現しないかぎり、世界の平和は達成できないと私は思う。

戦争やさまざまの災いは、結局は自分自身の問題に帰するのだと思う。個人的な対立が平和を乱し、それがさらに外部に対立を引き起こす。少しでも対立があると、私達は自分が完全な人間であると感じることはできないようだ。では、誰が対立をつくり出すのだろう？ それは、またしても私達なのだ。自分の中の未解決の問題を自分のかわりに現実に見せてくれる人に対して、私達は怒りを感じるのだ。

私に言わせれば、この原理は世界中で働いている。もし、自分自身とうまくやってゆけなくなったら、他の人とうまくやってゆくことができるだろうか？ まじいわんや、自分が住んでいる世界とうまくやってゆけるはずがない。誰もが、悲しみ、怒り、恐れ、ストレス、心配などのない、健全な人生を送りたいと願っている。それなのに、私達はネガティブに自分を規定し続けているのだ。そして、もっと肯定的な見方を無視したり、時には恐れたりしている。肯定的な見方を感傷的だと、非現実的だと決めつける人々さえいるのだ。あらゆることを皮肉に見ることで身の安全を保っている知識人は、愛やその他のやさしい感情を単なる情緒主義だと、嘲っている。人間なんて、もともと善なんて持っていないのさ、と彼らは言う。ちょっと歴史を見たってわかるだろう（彼らが言っているのは本当は「僕は信頼とか愛とか何かやさしげなものに期待する気はない。だって、傷ついたり裏切られたり拒絶されたり、馬鹿に見えたりするのには耐えられないから」）。人類は確かに血塗られた歴史を持っている。だから、私達は何をなすべきなのか？ このままずっと同じことが続くのを許し続けるのだろうか？ 同じことを起こし続けるのだろうか？ それとも一人の人間の行いが真に違いを生むということを認識して、私達一人ひとりが自分の責任に目覚め、それぞれが内に持つ力を信じ、それを実現するように努力すべきなのだろうか？

つまり、ニューエイジとは、私達が望んでいる幸せをつくり出すために自分達の力を使う時代なのだ。悟りを開いた人達がみんな言っているように、不幸でいるためには非常な努力が必要なのだ。どうせなら、反対の方向へその努力を向けましょうよ。

自分のことが深くわかってくるにしたがって、私達は幸せな人生を送れるようになる。私達が幸せになるにしたがって、社会もよい状態になるのだ。

では、何が私達を引き止めているのだろうか？

現在、私達の社会では、進歩発展というと、だいたい科学技術の進歩を意味する。確かに、これまで私達は自分の知性を科学技術として形にする点ですばらしい発展をとげた。そして、多くの人々がその恩恵を受け、今や技術が私達の進化の媒体となり尺度となっている。そして今、科学技術を鉛の王様にまつり上げてしまった報いを、私達は受けているのだ。

科学技術は私達の自分自身に関する知識をはぎ取ってしまった。以前、私は世界一貧しい国について書かれた報告書を読んだことがあった。ヨーロッパの経済学者がまとめたものだった。この学者の目から見ると、世界一貧しい国とは、ヒマラヤの山の中にあるブータン王国だそうである（何年も前に私はこの桃源郷を訪れている）。このレポートを見せられた時、ブータン国王は「ブータンは技術的には貧しいかもしれないが、我々は精神的な豊かさと幸せを持っている」と言われたそうである。私達は互いに違った尺度を持っているのだ。ブータンの人々にしてみれば、精神的な豊かさを失ってまで、どうして物を生産しなければならないのか、不思議に思うのだろう。私達の方は、物の生産に役に立ちそうもないのに、なぜ精神的な豊かさなどを大切にする必要があるのか、不思議に思っているのだ。

科学技術は欧米の人々にとって進歩を意味するようになってしまった。しかし、科学技術それ自体は、私達が自分自身をどのように見ているかを反映しているにすぎない。もし、私達の中に否定的なものがあれば、それは科学技術の中に何らかの形で現れてこざるを得ない。それは避けることができないのだ。科学技術の進歩によって、私達はどんどん速度を増しながら動いている。何に向かって？ 私達は魔法のカーペットをモデルにして、努力に努力を重ねて飛行機をつくり出した。しかし、魔法の部分は消し去られた。魔法はあわただしさ、混雑、イライラ、怒り、そして胃潰瘍と心臓病とたくさんの事故にとってかわられてしまった。そして、地上のゴタゴタとおさらばして空を飛ぶという魔法のカーペット本来の目的とは、まったく違ったものになってしまったのだ。

科学技術をるべき位置に置くことを、私達は学ばなければいけないと思う。科学技術は人々が肉体的物質的に快適になるための道具なのだ。決して私達の進化の尺度になるものではない。科学技術には本質的に知恵はそなわっていない。どんなに洗練されて利口で仕事が早くても、コンピューターの人工頭脳は、やはり人間の手で制御されなければならず、人間の思考が必要なのだ。それとも、本気でコンピューターに自分の生活を支配してもらいたいと私達は思っているのだろうか？

学者の中には、もっと科学技術を“人間的”なものにする必要があると主張している人達もいる。自分達を破滅から救うためには、現在の科学技術の生み出す物に対応した高度の意識が、どうしても必要なだと彼らは警告している。意識と靈性を加味することによって、科学技術の新しい方向づけをしようと、彼らは提唱しているのだ。そうでなければ、私達はいつか、この地球を滅してしまうだろう。

自分がつくり出したものと自分自身を分けて考えることはできない。自分に対して持っているビジョンによって、私達は科学技術をつくり出す。もし、私達が自分は何者か、という問題に対して無関心であれば、それは無関心の技術をつくり出

す。私達が自然と調和を保っていない時には、科学技術もまた、自然との不調和を反映する。科学技術はこのように、私達の神経症、権力への気違いじみた欲望、混乱した感覚、ゆがんだ行動様式などを、そのまま反映しているだけなのだ。つまり、一方には狂暴性をはらんだ機械を生み、一方には生産物があり余っているのだ。私達は滅亡のパターンから自由にならなければならない。人間の、自然の、科学技術の、世界の秩序の法則を、しっかりと見直さなければならぬ。クリシュナムルティが言っているように、「秩序は道徳」であり、我々の意識の内容は、我々が自分に設けた枠の産物」なのである。私達は自分自身の過去の産物に他ならないのだ。知識もまた過去の産物であるが、考へているだけでは、現在の問題を解決することはできない。頭だけでは、もうどうにもならなくなっているのだ。もっとずっと大きな全体的な意識が、今こそ必要とされている——つまり、自分自身に気づきさえすれば、完全にバランスのとれた私達の宇宙と調和することができるのだ。

今では、科学も周囲の現実と私達の体験の現実を分離することはできない、と言ひ始めている。本当は、分離というようなことは何物の間にも、いっさい存在しないのである。もし、そのような分離を私達がつくり出せば、それは自分も周囲も滅してしまうのだ。

私の言葉で言えば、それはみんなで一緒にやらなければいけない、ということなのだ。人類というくさりの強度は、その一番弱い部分の強度のよって決まる。だから自分自身について学び、理解し、意識を少しでも上げるのは、私達一人ひとりの義務なのだ。では、まず何をすればよいのだろうか。自分に気づくのを拒否していると、さらに混乱を生む。混乱は自然法則、そして宇宙の調和に反する。なぜ私達は宇宙と争いたいのだろうか？

私達は自分で選択しなければならない。自分の内部のデザインを調和させることによって、宇宙の壮大なデザインを理解する努力を、自分はする気があるのだろうか？もしイエスという答えが出たとすれば、どのように努力すればいいのだろうか？

答えは簡単ではない、としか言えない。もし、本当の意味で自分とも世界ともうまくやってゆきたかったら、鍛練を重ね、心を広く持ち、自分に忍耐強く、自分の体に親切に、無限の愛を心に持つていなければならぬのである。

## 虹の瞑想

たましいは、この物質界での住処を得るために、地球の法則に従って自分の宿るべき肉体をつくり出すと言われている。肉体は、たましいに時間と空間を味わうチャンスを与えるのである。チャクラがこの肉体の現実を支配しているが、これは七つのチャクラを通して、人間は自分自身を体験するからである。チャクラはたましいの実体(大いなる自己)とその人の心と肉体をつないでいる伝達機関であり、コントロール室でもあるのだ。

したがって、チャクラやチャクラが持つさまざまエネルギーについて知る

ことは、肉体を持った人間とは何かを理解するために、どうしても必要なのである。

自分の体を七つの音、七つの異なった波動、虹の七色を備えた楽器だと想定することは、私にはとても役に立った。私がずっと一つの音ばかり出し、一つの色だけに注目していると、私の演奏は単調で退屈きわまりないものになる。しかし、すべての音や色や波動を使いこなせるようになると、ハーモニーに満ちた変幻自在の芸術をつくり出すことができる。私は自分の楽器を使いこなして、美しい音楽を自分のために演奏できるようになった。

エネルギーの七つのチャクラを開ける必要はまったくない。七つとも、いつも開いていて、くるくるまわっていて、完全に調和しているからだ。かたくなに閉じて、チャクラの存在も重要性も認めようとしないのは、私達の心なのだ。だから、チャクラを開けるために努力する必要はない。私達はチャクラの存在を認めるために、心を開く練習をするだけでよい。そのためには、まず瞑想が大切なのである。

私達の人格は、チャクラのエネルギーをどの程度認識するかによって決まっている。認識のレベルによって、豊かか限界があるか、開放的か閉鎖的かが決まるのである。自分の靈的な次元を学べば学ぶほど、私達はチャクラを意識するようになり、高い波動を持つ人間になる。自分の意識をチャクラの靈的なエネルギーに向けると、意識それ自体がより高い次元の意識へと広がり、目覚めてゆく。このように、私達はチャクラを通して、心と体と靈を完全に一体化させるのである。

七つのチャクラの特徴を説明するには、それぞれのチャクラと関係のある感情を述べるのが、一番分かりやすいと思う。それとともに、その感情に関係している内分泌腺の働きも明らかになるだろう。

第一のチャクラは、ベースチャクラ、または根のチャクラと呼ばれているが、ちょうど脊椎の底部に位置していて、私達の肉体の次元の理解を支配しているチャクラである。これは地に足をつけるためのチャクラでもあり、私達を地上に落ち着かせ、両足をしっかり地につけさせるチャクラである。これは大変実利的で、ウルトラ現実的な、“生き残り”のためのチャクラで、戦うか逃げるか反射的に、私達はこのチャクラで態度を決める。このチャクラは副腎と対応しており、腎臓、脊椎の機能を支配している。このチャクラの色は赤である。

インドのヒンズー教の聖者は、このベースチャクラは人間の意志のエネルギーの通路であり、人間のシステム全体がこのチャクラによって支えられ、バランスを保っていると主張している。このチャクラは不安が住みつく場所でもあり、生存への欲求、所有欲、物質主義などが巣食う所でもある。危険にさらされると、私達はこのチャクラを通して恐怖や怒りを感じる。そのために、このチャクラはまたの名を生き残りのチャクラとも言う。

このことから、なかなか興味深い変化が生じている。根のチャクラは、地上に根をおろしているので、基本的には非常に安定している。しかし、進化のプロセスでさまざまな条件をくっつけてきた人間の心は、脅威を感じると警戒信号

を発して、副腎がソアドレナリンを分泌し始めることを学んだのである。

人間のいない場所で生活している動物は、人間に出会ってもこわがらないそうである。今でもまだ、野生の動物は追われている時しか、自分達を食料にしている動物に反応を示さないそうである。それ以外の時は、お互いに平和に、相当の距離を置いて仲良く共存している。

人間が初めて狩りをして動物の肉を食べるようになった時、内分泌腺と安全のチャクラの関係が、ゆがんだ形で発達し始めたのだろうか？ いったい、いつ頃から人間は人間を恐れるようになったのだろう？ チャ克拉の使いかたがだんだん上手になってくると、この分野を探究するのも、なかなかおもしろいものである。それに、私達が感じている基本的な不安感を説明するのに役に立つのかもしれない。

チャクラの勉強を始めた時、私がまず取り組んだのは、この第一のチャクラだった。しかし、一方では、他のチャクラの位置と特徴について勉強する必要もあった。

第二のチャクラは、性のチャクラ、創造性のチャクラと呼ばれ、生殖器に位置している(女性なら卵巣に、男性ならこう丸に)。このチャクラの色はオレンジ色で、人間関係、セックス、生殖などの生殖的な機能を支配している。

第三のチャクラは太陽神経叢に位置している。分泌腺は脾臓と対応しており、肝臓、胃、胆のう、脾臓、それに神経組織の一部の働きを支配している。このチャクラは感情と個人の権力問題のはけ口である。色は黄色である。

人のオーラを見る能够な人に言わせると、自分の子供とか愛している人々に強い執着を持っている人は、だいたい第三のチャクラから何かが洩れているそうだ。黄色のものがそのチャクラからあふれ出して、愛する人に対する心配や所有欲や物欲などを体験している。その人のエネルギーを放出しているのだ。これは、子供のことを心配するな、と言っているわけではない。ただ、子供の幸福のために心配すべきであって、自己満足のために心配すべきでない、と言っているのである。

この第三のチャクラは、他のチャクラに比べると、ずっと問題の多いチャクラである。これはこのチャクラが感情の座だからである。感情のバランスが崩れると、胃潰瘍や消化不良を起こし、肝臓、脾臓、胰臓などが悪くなる。肯定的なエネルギーと否定的なエネルギーの極は、この太陽神経叢に位置しているが、この二つのバランスがとれていれば、二つの極、つまり、肯定(ポジティブ、男性的、陽)と否定(ネガティブ、女性的、陰)が完全に調和がとれているということである。私達は太陽神経叢の前、つまり胃の前のあたりで腕組みする時は、自分を守る姿勢をとって、このバランスをくずす恐れのあるエネルギーを避けている。別の言い方をすれば、腕を組んで自分の感情が傷つけられないように守っているのだ。

私達は感情が激しくなると、そのつもりがなくても、ほとんど自動的に泣き始める。涙が込み上げてきた時になるがままにまかせていると、次にむせび泣きを始める。むせび泣くという行為は太陽神経叢をやさしく、時には激しく

マッサージする効果を持つ。思い切り激しくすり泣くと、太陽神経叢はやさしく抱きしめられたようになってリラックスし、それまでたまりにたまつた感情を解放してゆく。思い切り泣くと、太陽神経叢にある第三のチャクラがバランスを回復し、つもりつもった感情の重荷から自由になる。

すり泣いてもまだ足りないと、時々、吐くこともある。吐くという行為は、横隔膜の筋肉を活性化させる。横隔膜自体は傘の形をした筋肉で、下の三つのチャクラと上の四つのチャクラを分けている。吐くと、感情的な重荷の原因になっているものを取り除くことができる。だから、泣いたり吐いたりした後、私達はあんなにすがすがしく、うっとりした気持ちになれるのだ。これこそ、体がこれ以上の感情の重荷には耐えられないという時の防御システムなのである。

第四のチャクラはハートのチャクラと呼ばれている。対応する分泌腺は胸腺である。第四のチャクラは、心臓、血液、循環器を支配している。また、頭脳にある迷走神経にも強い影響力を持っているうえに、免疫と内分泌組織も支配している。色は一般に緑色であるが、見る人のレベルによって違って見えることもある。

ハートのチャクラで瞑想を始めたとたん、大切なのは、受けいれること——他の人を受け入れ、自分の中の愛を受け入れることだと私は悟った。祈りは神へ語りかける行為だとよく言われている。瞑想はチャクラを経由して神が内なる神を使って、私達に語りかける時間なのだ。すべてのチャクラで瞑想ができるようになることこそ、内なる平和を完成させるための道なのだ。

サンスクリット語でハートのチャクラのことをアナハタと言う。これは、“常に新しく、自立するもの”という意味である。ハートのチャクラで私達は恋に落ちる。直観的に誰かに魅力を感じると、私達はハートのチャクラから動き始めて、黄色の太陽神経叢のチャクラへと下り、さらに愛に刺激されてオレンジ色に輝いている性のチャクラへと下りる。最後に、根のチャクラの温かい赤のエネルギーへと行き着いて、その人と一緒にこの地上で生活し、落ち着きたいと思い始める。

ハートのチャクラはたましいの中心であり、私達の人格はこのハートのチャクラによって決まる、と東洋の神秘主義者は言っている。たましいは“永遠のホルモン”を製造していて、愛によって、私達を永遠に若々しく感じさせてくれるそうだ。

この“永遠のホルモン”は私達が恋をしている時に、ハートからエネルギーとして発散すると言われている。このホルモンは、私達の下の三つのチャクラをうるおす。

私達が決して“恋に昇る”とは言わず、“恋に落ちる”と言っているのは、とてもおもしろいと思う。たぶん本能的に、ハートのチャクラで最初に相手に惹つけられ、そのあと順に下のチャクラへと下りて、最後に落ち着くということを知っているからだと思う。

第五のチャクラは、喉のチャクラである。甲状腺を中心に活動しているもの

で、肺、声帯、気管支、それに新陳代謝を支配している。このチャクラの色は青である。ここは、表現と伝達のセンターであるだけでなく、判断を下す場でもある。

この第五のチャクラは、今、特に大切なチャクラである。他人を批判せずに自己表現をすることこそ、自由な民主主義をうまく機能させるために必要だからである。自分が見たままの真実を話すことは、とても大切である。しかし、その時、他人を傷つけるような非難めいた批判をしないように気をつけるべきだと思う。私達が他人の中に見るのは、自分の内にあるものの反映だということを思いだせば、少しは他人に批判的でなくなるだろう。他人をあからさまに非難している時は、実は、自分が一番嫌っている自分自身的一面について語っているのである。自分が誰かのことを非難しているのに気づくと、私は第五の青のチャクラで瞑想し、その感情をよく調べてみる。そうすると、自分の話の進め方がよくわかり、言うべきことと黙っているべきことの判断もよくつくようになる。

第六のチャクラは、額の中央に位置している。これは第三の目としてよく知られており、脳下垂体に対応している。色は普通は藍色、つまり、赤と青をませた深くて力強い色である。このチャクラは、脳の下半分、神経組織、耳、鼻、人格の目である左の目を支配している。

アイデアと想像力はこの第六のチャクラを中心にしている。またこのチャクラは、心の中のビジョンを映し出し、そのビジョンの外部への表現を支配している。無限の想念を実現するには、脳下垂体を刺激するとよいと言われている。瞑想中に脳下垂体を刺激しているビジョンを思い描けばよいのだそうだ。そして第三の目に集中して、心の中のビジョンが無限に広がるままにするそうである。

第七のチャクラは王冠のチャクラとも言い、頭のてっぺんにある。色は紫色か白である。松果腺と対応しており、脳の上半分と右の目を支配している。王冠のチャクラには、他のすべてのチャクラの模型が含まれている。このチャクラこそ、他のチャクラと協力して、無限の意識、神の目的へと語りかけているのだ。こチャクラを通して、神と一体化することができると言われている。

上の三つのチャクラは黄金の三角形と言われる形を形成している。これは宇宙の調和をバランスよく反映している三組のエネルギーを代表し、このエネルギーは対内の神経組織へと浸透してゆく。さらに、この三つのエネルギーがどんどん注ぎ込まれ、全部のチャクラを順に根のチャクラまでうるおしてゆく。根のチャクラでその調和を地におろすことによって、私達に安定感を与える。その後、この宇宙のエネルギーは、それぞれのチャクラを再び上へと昇ってゆき、王冠のチャクラに達してこのサイクルは完成する。いわば、プラグを差し入れてエネルギーが流れ出し、回路が通じたのである。

しかし、残念なことに、大部分の人の場合、宇宙のエネルギーがチャクラを通って上に昇る途中で、性のチャクラか太陽神経叢チャクラで滞ってしまっている。執着や反発、愛欲や所有欲、権力欲などの感情に引っ張られてしまうの

だ。私達が宇宙のエネルギーを取り入れているかいないかは問題ではない。いつだって取り入れている。しかし、私達は第二、または第三のチャクラで、そのエネルギーを停滞させてしまって、回路を完成させないので。これらのチャクラで瞑想すると、この停滞が解消しやすくなる。びっくりするほどのすばらしい結果を得ることも多い。また後の章で、この瞑想のやり方を詳しく勉強することにしよう。

すべてのチャクラの存在に気づき、実感すると、私達の意識は拡大し、健康と幸福を運ぶエネルギーの源の存在に気づくのである。各チャクラの間のバランスがとれていないと(正確には、各チャクラの意識の間にアンバランスがあると)、エネルギーの流れを阻害し、健康も損なわれてしまう。

## 子供のような探究

私はステファン・ホーリング教授にひとりの人間としての興味を持ち始めた。彼と多少みだらな話をしてみようかと思った時、彼は議論を私が望んでいた方向へ持っていった。

「人類はある条件のもとで百万年前から進化してきたけれど、今や条件がすごく変化してしまったんですね」と彼は始めた。

私が聞きたいのはそこだった。「人はいまでも進化しているのですか?」と私はたずねた。「それとも私達は破滅に向かっているのでしょうか?」

「我々は自分たちを滅ぼしてしまう可能性も大きいんですよ」と彼は答えた。そういう表現の仕方に私は興味があった。「進化はとてもゆっくりしています。ギリシャ人だって今の我々の科学を理解することができただろうと思います」

「でも、条件がまた変わって、私達の行動も変わる可能性はありませんか?」

彼は確固たる答えをコンピューターで叩き出した。「もし我々が、自らを滅亡させなければ状況は変わりますよ。でも人間は今も原始人のように行動しています」

「滅亡するかもしれないという脅威が変化のきっかけになりませんか?」と私が聞いた。

「今までのところ、あまりそうでもないですね。もし宇宙の大きさがわかれれば、人類の争いごとなんか些細なものです」

「そうですわね」と私は答えた。彼が理解しているように理解できたらどんな感じがするのだろううかと思った。

「宇宙も」と彼は続けた。「宇宙の中にあるすべてのものも、完璧な法則で説明できるのです」

「ということは、偶然はないということですか?」と私は聞いた。

「その通りです」

「では私達の行動も、その法則の一部なのですか?」と私はたずねた。

「いいや」と彼は答えた。「我々の行動は、人間の本質の一部なのです。人間の

本質はある状況下では進化するのです」

「私達は進化過程を引き継いでいるのですか?」

「そうです」

私は何かがわかり始めたような気がした。

「あなたは、宇宙は愛にあふれた場所だと言えると思いますか?」と私はたずねた。「あなたは、すべてのことは完璧な法則で説明できるとおっしゃいましたね」

「その通りです」

「それならば、宇宙は調和しているということでしょう?」

「その通りです」

「では、その調和したエネルギーは愛に満ちているのかしら?」

「僕には、そのエネルギーが愛に満ちたものかどうかはわかりません。愛という言葉で、宇宙を形容できるとは思いません」

「では、どんな言葉で表現できますか?」

彼はしばらくの間、考えていた。

「秩序(オーダー)です」と彼は言った。「宇宙は完璧な秩序です」

「それなら問題は、私達が自分自身と自分の行動をどう見るかということと、その秩序をどう結びつけるかということになりますか?」

「おそらくね」と彼は言って、「それはどういうことですか?」と聞いた。

「つまり……」と私は言い始めたが、私の考え方を口にするのにとまどいを感じていた。「私達はみんな、この世は本来的に混沌としたものではないかと思い込んでいるけれど、あなたが言うようにすべてのことに宇宙の秩序が働いていると信じれば、愛を生み出すことができるのではないかでしょうか? 反対に、この世は混沌としていると信じていれば、破壊を招くのだと思います。別の言い方をすれば、私達は宇宙の本来的な状況をどう信ずるかによって、自分自身をはじめ、人類を定義づけているのではないでしょうか?」

「僕には宇宙と人間のそのようなつながりがわかりませんね」と彼は答えた。

「つまり……」と私は続けた。「もし、私達が、宇宙を混沌とした危険な場所だと感じていたら、宇宙がつくり出しているすべてのもの、人間をも含めたすべての物が脅威だと感じられるのだと思います。だから私達の行動が混沌とし、脅かされ、未熟なままなのです。いいかえれば、私達は自分がどのように宇宙を見ているかに正比例して行動しているのではないかでしょうか? 科学の役割は一般的に宇宙とは何かを説明することだから、あなた方科学者は、私達が“現実”をどう認識するかという点で鍵を握っていると思います」ステファンは私の顔をじっと見つめた。

「だから、もしあなたが、宇宙は調和していて、完全な秩序のもとにあると言ってくだされば、たぶん私達はそれと同じ光のもとで自分を見ることができると思うのです」

彼は微笑んだ。「でも、今までのところ、人間は犯罪をなくすことには成功していないよね」とかれは言った。

「きっと、あなた達科学者がまだ十分に調和を信じるところまでいっていないからでしょう。つまり、科学の探究の目的はいったい何ですか？」

彼は車椅子から私を見上げただけで何も答えなかった。

「科学とは神を見つけるために存在しているのではありませんか？」

ステファンは車椅子のボタンを押すと、クルッと向きを変えた。

「こちらへいらっしゃい」と彼は言った。

彼は再び自分のオフィスへと私を連れていった。私は彼のあとを追った。私達二人のあとを看護婦さんが追った。彼は車を例の机の方へ動かしていった。

「あの壁を見てください」と彼は指示した。彼の机の後ろの壁にかかっているフレームに入った“マンガ”的方へ私は近寄った。

ステファンは私を見てニッコリした。私は顔を近づけてよく見てみた。ホーリングともう一人の科学者ハートルのマンガだった。それは、二人が難しい等式や記号を貼りつけた黒板の前に立っている図だった。二人の男はその数式を熱心に見ていた。マンガのステファンはこう言っていた。「ハートル、とうとう宇宙の意味を数学的に解明できたよ！ ガッド、この発見の喜びが大好きなんだ！」

私はそのマンガを見て声をたてて笑った。それから、ステファンを振り返って、「もし、このマンガ家が、このセリフをガッドのかわりゴッドと書いて、『ゴッド、この発見の喜びが大好きなんだ！』って書いていたら、本当に面白かったのにね」と言った。

私は軽い気持ちで、ちょっとからかって言ったのだが、ステファンはそうとはとらなかった。彼は私の目をじっと一分間も見つめていた。うっとりした表情が彼の顔いっぱいに広がった。彼の指がコンピューターを叩き始め、機械じかけ声が言った。「このマンガを描いた人は、僕の仕事を知っていたかもしれないけど、僕のことは知らなかつたんだ」

私はハッと息を止めた。私は何か言ってこの瞬間を台無しにしたくなかった。私はただ彼の顔をじっと見つめていた。彼の目から発する愛にあふれたエネルギーは、私を当惑させるほどだった。ステファンはメッセージを打ち出した。「ここに来て、僕にキスをしてください」

私は彼の所へ歩いていくと、彼の小さな体の上に身をかがめた。「あなたは誰とでも、キスをするの？」と私はからかった。

彼は顔を輝かせて、「そうさ」と言った。「いつか一緒に映画を見に行こうね」

その日の午後、ステファンと私は“普通”的話をして楽しんだ。彼は私がどのように、“映画の魔術”をつくり出すのか知りたがった。私は彼がどのように“人生の魔術”を見ているのか知りたかった。「僕たちは同じ疑問を持つ者達で、そして同じ夢を追いかけている者」だと彼は結論した。

でも、ステファンは、一瞬たりとも、自分の中にも私の中にも、その他の人達の中にも、宇宙の秘密が隠されている、という私の考え方を認めなかった。私も十二歳の子供のような信念を、彼に押しつける気はなかった。それに、その

必要もなかった。私にとって彼は、子供のように驚いたり、不思議がったりする心を持っていれば、内なる平和を得られるということを、身を持って証明している人だった。

“宇宙の調和を理解すれば、調和した人間になれるということを彼自身が証明していた”

今度イギリスに戻ってきたら、彼を映画に連れていくと私は約束した。彼は私とデートすると約束した。

彼のオフィスを出る時、私は自分の十二歳の確信を持ち続けることを約束した。

彼がもしひとつつの確かな見本ならば、それは最も幸せで、かつ賢明で役に立つ決心だと思う。